クリスマス礼拝　　2020 年１２月２０日（日）
宣教　「暗闇に輝く光」
テキスト：ルカによる福音者２章：８～２０節
（聖書の個所は最後にあります。）

皆さま、クリスマスおめでとうございます！
コロナウィルス感染拡大の中ですが、皆さまと共に２０２０年のクリスマス礼拝をこうして守れます事をうれしく思います。
集われました皆様とご家族の上に主の祝福を心よりお祈りいたします。
神の子イエスさまの誕生を共に喜び、主に希望をおいて様々な不安と怖れ混乱の中にある地上に主の平和が一日も早く実現することを祈ります。

さて、今日の聖書の個所には、主イエスの誕生が最初に知らされた出来事が記されています。天使は、羊飼いたちに御子の誕生を最初に伝えました。
「8:その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。」とあります。ベツレヘムの野辺で羊の群れの番をしていた羊飼い。
羊飼いたちは、夜通し、羊たちを泥棒や野の野獣から守っていたのです。
約２０００年前羊飼いの仕事は人々から低くみられていた仕事だったようです。今で言う３Ｋで、きつく、きたなく、危険でもあったからです。神さまは、天使を用いて御子イエスの誕生の知らせを、王様や地位の高い人々ではなく、この羊飼いたちに最初に知らされたということは深い意味があるのだと思えます。
宇宙世界を創造された神さまの救いの働きは、多くの人のまだ知らない、目のとめない場所で生きている人々に伝えられるということです。このことは今日でもあてはまることだと思います。

聖書の 10 節を見ると天使は「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる、と羊飼いたちに語りました。
恐れではなく、喜びが伝えられたのです。それも大きな喜びです。羊飼いはもちろん、民全体の喜びです。民全体とは、イスラエルの民のことですが、世界の人々全体に及ぶ喜びです。
イエスさまの誕生の喜びは、ユダのベツレヘムの野辺からイスラエル全体、そして世界中に及ぶということです。そして歴史においてその事は事実として実現したのです。わたしたちの所まで届いたのです。その大きな喜びの知らせは一度きりではなく、時代を超えて繰り返されて行く喜びの出来事なのです。
今日ここに集められたわたしたちは、洲本の地で御子の誕生の知らせの喜びに

与っています。そしてその喜びは淡路島に日本中へと伝わっているのです。海の波のような大きな神さまの愛を覚え感謝したいのです。
　救い主イエス・キリストは小さい姿でこの世に来てくださいました。
　コロナウィルス感染拡大で不安の中にいる、わたしたちの中に生まれてくださったのです。神は我らと共に、インマヌエルとして来てくだったのです。苦しんでいる人、病気の人、生きることに悩んでいる人、貧しい人、蔑まれている人の中に来てくださったのです。主イエスという光は、暗闇の中に輝いているのです。そして消えることはないのです。

　その後、天使の大群がイエスの誕生をこぞって賛美しました。
13:すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。
14:「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う
　人にあれ。」と。
　神に感謝し、神を賛美できるということは何と幸いなことでしょうか。

　大きな声で、身体を使って神さまを賛美できることは何と幸いなことでしょうか。ここで少し考えたいのです。
　「賛美する」とは、声で賛美することだけではないのです。賛美は心なのです。それがいろんな表情に表れてくるのです。なくてならぬのは神さまを賛美する心です。
　ある人のことを思い出します。瞬きの詩人と言われた水野源三さんです。源三さんは、子どもの時、脳性小児麻痺になり、首から下は動かなくなりました。ことばも語る事はできません。水野さんはお母さまに助けられまばたきで文字を読みやりとりをされるようになり、聖書に触れ、イエス様の愛を受け入れキリスト者となられました。まばたきで信仰の詩を沢山作られ詩集となっています。すでに水野さんも源三さんに心血を注いで愛情を注がれたお母さまも召されましたが、その水野源三さんの詩に、クリスマスを歌った貴重な詩があります。
　以前にもご紹介したことがあるかもしれませんが「救いの御子の降誕を」という詩です。わたしはこの詩をクリスマスの季節に読む度に自分自身が戒められ教えられ学ばされる思いになるのです。

　「救いの御子の降誕を」
　一度も高らかに
　クリスマスを喜ぶ

賛美歌を歌ったことがない

一度も声を出して
クリスマスを祝う
挨拶をしたことがない

一度もカードに
メリークリスマスと
書いたことがない

だけど だけど

雪と風がたたく部屋で
心の中で歌い
自分自身にあいさつをし
まぶたのうらに書き
救いの御子の降誕を
御神に感謝し喜び祝う

　ここには豊かなあふれ出る神さまへの感謝があり、その心が賛美となっています。イエスさまの誕生を喜ぶ心が溢れ出しています。
わたしたちは今年は、コロナウィルス感染防止のために、礼拝でマスクなしでみんなで一緒に声を合わせて賛美を歌うことができない状況でした。
もうしばらく続くかもしれません。
水野源三さんの詩の言葉を借りれば、「だけど、だけど」なのです。ほんとの意味で賛美はできるのです。神さまに与えられた心でイエスさまと神さまをほめたたえることができるのです。
羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだった
ので、神をあがめ、賛美しながら帰って行きました。またきびしい仕事へと戻って行ったのです。現実の仕事は、また置かれた現実は変わらないけれども羊飼いたちの心は、喜びにあふれました。心が変えられたのです。私たちの現実は昨日（きのう）も今日も明日も変わらないかもしれませんが、一人一人の心に御子の誕生という希望の言葉を聞き、希望の光を頂いたのです。
主はいつもわたしたちの心の中に共にいてくださいます。この事実を感謝してクリスマスから新しい年へと歩んでいきましょう。

◆羊飼いと天使

8:その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。

9:すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。

10:天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。

11:今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。

12:あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

13:すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

14:「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」

15:天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。

16:そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。

17:その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。

18:聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。

19:しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。

20:羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。